熊本日日新聞　平成13年(2001年)6月8日　金曜日

新生面

熊本市の高木正三さん(五三)は「何かやっていないと寂しい性分」の人だ。都市農村交流＝グリーン・ツーリズムのミニコミ誌を作り始めて半年が過ぎた▼〝高木道楽情報〟と笑う月刊「ドリーム」は百人の読者で満杯。音さたなしならバッサリ切り、切った分だけ新顔を入れる。「原稿や反響がくることで私も元気になれる。やる気のある人がいつも百人おればいいんです」▼手紙やメールが届くとパソコンにパチパチ。発行日がせまればその文章を動かして印刷。さらに協力者の「オッカナイ」(夫人)と袋詰めに切手はり。目下、郵送費は手出し。飲み屋で会う知人に「まだ物好きなことを」と冷やかされつつ、〝お調子者〟高木さんの奮闘は続く▼四月から農業者年金基金に勤務。前職は九州農政局構造改善課の課長補佐。局内のツーリズム応援誌を昨年二月まで三十九回発行。廃刊を惜しむ声に〝おだてられ〟「ドリーム」編集長に。今度は完全な個人誌だ▼百人は九州を中心に農家、研究職、行政、民宿経営…とさまざま。約六割が女性で寄稿者の八割も女性。デコポンのオーナーを呼び掛けたり、子牛が生まれた喜びや農家レストランの夢を語ったりと現場第一線の声が文面に躍る▼グリーン・ツーリズムといえば農水省系団体による専門家養成講座も今月始まった。将来は農山村の基幹産業にとの期待も。価格は下がる一方のコメや野菜に農家の実生活は大変だが「みなが生産するだけじゃダメと思い始めている」と高木さん▼明日を信じたい思いが、愚痴も言い合える「ドリーム」への愛着につながっているようだ。

2001. 6. 8

↓ 2年後です。地方区から全国区？

平成15年(2003年)6月12日　木曜日

新生面

国家公務員、高木正三さん(五四)は熊本市から東京タワーがある港区の農業者年金基金本部事務所へ今春転勤となった。並んで待つのが二十分、食べるのは十分＝見知らぬ者同士が壁のシミを眺めながら昼飯が来るのを待つ東京チョンガー生活の毎日だ▼高木さんが道楽的に発行してきたのが「ドリーム」。三十一号を数え、百人限定だった読者は九州中心に百七十人に増えた。生産者、消費者、行政マン、研究者にとっても食と農やグリーンツーリズムの情報源として全国的に注目される存在▼しかし毎月の切手代は一万五千円にも上る。物価高の東京への転勤で継続発行は危うい状態。そこで、タダ読みしてきた愛読者らが任意団体「ふるさと食農ほんわかネット」を設立。広報誌として「ドリーム」も生き延びることに▼先日、団体のお披露目を兼ねたシンポジウムが開かれた。読者随一の投稿マニアで事務局を引き受けるゴーヤー洋子さん(料理店経営)が司会。会員の一人の大串和紀九州農政局長は局長室で育てた稲穂を持って登場し、「食や農に関心が高くなってきたことは非常にいいこと。まずは市民のネットワークの広がりが大事」と発言▼欠席裁判で理事長になったという徳野貞雄熊本大教授も「熊本の生活者と生産者が知り合いになるだけでも相当メリットがある」と語った▼さて、当日は裏方を務めた高木さん。スローライフの食や農を求めてきた当人が東京で恐ろしいほどのスピード生活とは皮肉だが、行動する会をめざす「ほんわかネット」の広報誌担当として今度は、どんな編集さばきを見せてくれるか。

2003. 6. 12